

第1学年 算数科学習指導案

日 時 6月19日(水) 5校時

場 所 1年教室

指導者 教諭 森本 美和

研究主題	教職員の教育力向上と児童の自立した学びを促す指導の工夫
研究の視点	見守り型支援による児童の対話を重視した活動を設定することで、プログラミング的思考を高めることができるであろう。

1 単元名 「のこりはいくつ ちがいはいくつ」

2 単元設定の理由

- 本単元では、求残・求補・求差の場面をとらえ、減法の意味を理解できるようにするとともに、引き算の立式や計算ができるようにすることをねらいとしている。前単元で学習した加法の場面と対比してその違いに気付かせ、減法の場面を明確にしていくことで、数の増減に対する感覚を養っていきたい。
- 本学年の児童は、数量や数の大小については全員理解できている。しかし「いくつといくつ」の数の分解においては、文字や言語だけで量感をつかむことが難しい児童もいたため、ブロック、ドット図、百玉そろばんなどを用い、数量や操作を視覚的に確認する活動を繰り返し行った。本単元の学習においても、半具体物や図などを用いて視覚的に数量や操作を確認できる活動が必要だと考える。
- そこで指導にあたっては、次の点に留意する。
 - ・ 問題場面と数量の変化が体感を通して理解できるよう、半具体物での操作活動を設定する。
 - ・ 見守り型支援により、児童達自身で対話しながら解法を導き出せるよう、話し合い活動の時間を多く設定する。(プログラミング的思考)
 - ・ 加法と減法を対比することで、より数の増減が感じられるようにするため、加法と減法の両単元で共通のツールや言葉を使用する。
 - ・ 図や式の理解を深める話し合いができるよう、「判断のしかけ」を用いためあてを設定する。

3 単元の目標

- 減法の意味や計算の仕方を理解し、その計算ができる。
- 数量の関係に着目し、求残・求補・求差の場面を減法として考えたり、減法の計算の仕方を考えたりすることができる。
- 数量の関係を具体物や図などを用いて考えたり、式に表したりするよさに気づき、身の回りから減法の場面を見付け、減法を用いようとしている。

4 指導計画 (全9時間)

- 1～5時 のこりはいくつ (本時3/9)
- 6時 0のひきざん
- 7～8時 ちがいはいくつ
- 9時 おはなしづくり

5 本時案

- (1) 主眼 減法の場合について、ブロックを操作したり図を選択したりする活動を通して、「数が減る」ことや「減法の式になる」ことに気づき、残りを求めることができる。
- (2) 準備 掲示（挿絵、式、図） ブロック ホワイトボード 10 ます枠
- (3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点
1 マッチング問題をする。 ・ 加法の挿絵、図、式 2 課題をつかむ。	・ 減法と比較できるよう、加法の学習を想起させるマッチング問題を設定する。
残りがわかる図と式はどちら？	
3 図や式についてグループで話し合い、全体で確認する。 ・ 数の減少がわかる図 ・ 残りの部分 ・ 減法の式 ・ 図のかき方 4 練習問題を解き、確認する。 ・ 図、式 ・ 残り	・ 加法と減法の違いに気付くよう、「ブロックを動かしてみるとどうなる？」「反対の図や式を選ぶとどうなる？」と問う。 ・ まとめに活用できるよう、キーワードを板書しておく。 ・ 図の理解を深めるため、「減る」「残り」の部分我问う。また、問題文に合わせながらかいてみせたり、問題に合う挿絵を尋ねたりする。 ・ グループで協力しながら多数の問題ができるように、1 人ずつ違う問題を配付する。
本時における児童の着地点 図の丸を消して残りを数える。数が減るから引き算の式を作る。	
5 本時の振り返りを発表する。 ・ 減法の図や式	・ 言語化できるよう「わ・た・が・し」の 4 観点を示す。

- (4) 評価 「数が減る」ことや「減法の式になる」ことに気づき、残りを求めることができたか。
- (5) 板書計画

6/19 のこりはいくつ

のこりがわかるのは？

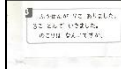
ふうせんが 7こ ありました。
3こ とんで いきました。
のこりは なんこですか。

選択肢


 $7-3$


 $7+3$

児童の考え


 はひきは 7 3 へる
 しき $7-3$


 $7+3$
 ふえる

へる けす のこり ひきざん

まるをけして、のこりをかぞえる。かずがへるからひきざん。

練習問題

① 
しき $4-1=3$
こたえ 3びき

② 
しき $5-3=2$
こたえ 2つ

③ 
しき $5-2=3$
こたえ 3びき

④ 
しき $4-2=2$
こたえ 2だい

⑤ 
しき $5-1=4$
こたえ 4にん